

新任・若手小学校教師の経験と変容過程

The Process Analysis of new teachers' learning from Experiences.

曾山いづみ

Soyama Izumi

東京大学大学院教育学研究科

The University of TOKYO Graduate School of Education

Key words :new teachers , Experience , TEM

問題と目的

ベテラン世代の教師の退職に伴い、小学校における新任・若手世代の教師の割合が増加している。新任教師が今後の教育をになっていくことを考えると、新任教師がどのような経験をし、どのように変容していくのか、そのプロセスを明らかにしていくことが重要である。しかし、新任教師の研究は振り返り研究が中心となっている。そこで、本研究では「今、ここで」の語りから「時間」と「経験」を積み重ねていくこと、その中での質的変容のありようを記述していくことを目的とする。

方法

新任小学校教師を対象に、①09年5～6月（1学期）、②09年8月（夏休み）、③09年9～10月（2学期）、④10年3月末以降（3学期末以降）、の縦断的インタビューを行った。インタビュー内容は、印象に残っていること（出来事・エピソード）、教師になってからの変化、困難ややりがいについて、である。得られた音声データを逐語録にし、それを複線経路・等至性モデル（TEM）を援用して分析を行った。

結果と考察

「繰り返し語られる」こと（経験・エピソード）に着目して語りを抜き出し、分析を行った。ここではA先生の例を挙げて述べることにする。

A先生：都内郊外中規模校に勤務。新任時は4年生担任（約20人）。女性。1年目に計4回のインタビュー。

クラスの「問題児」、暴力的で反抗的な男の子（aくんとする）について繰り返し語る。09年6月のインタビューでは、aくんについて、「悩まされる。その子のことがよく頭の中に入り込んでくる」と語っていた。8月時点では、aくんの保護者の方と話したことで、学校での態度と家とのギャップを知り、見方が変化したことを語っていた。10月のインタビューでは、2学期になってaくんと「会話ができるようになった」と語り、1学期の状態を「新しい先生だから、自分ができないということを隠そうとして、問題行動になっていたんだと思う」と理由をつけて振り返っていた。ここで問題行動の原因は腑

に落ちたのかと思われたが、10年3月のインタビューでは印象に残っている出来事としてaくんとバトルを挙げ、「今振り返ってもあれはすごかった。ものすごい暴れようだったのが最後なぜか落ち着いた。あれはなんだったんだろう？」と語っていた。

A先生の経験は、わけがわからないがとても激しいaくんの問題行動・反抗的態度に悩む→aくんの保護者とのやり取りを通して、自分が思っているよりもずっとaくんは子どもであることを認識する→aくんが自信を持つてできることを増やそうとする→会話ができるようになる→びっくりするくらい落ち着く、というようにまとめられる。一方、それらの経験を通してA先生の語り方も変容していく。A先生の語り方は、「対応に悩んでいる」とき、「見方が変わる」「行動に理由をつける」ことができたとき、「振り返って考える」「意味づけをし直す」ときが変容のポイントであると考えられた（図1）。

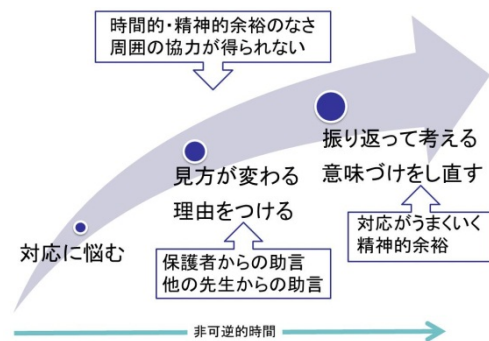


図1 A先生の語り方の変容

繰り返し語られることは、その人にとって意味を持ち続ける、何かを喚起させる経験であるといえる。同時に、繰り返し語られることというのは、始めの頃はあまり語られず、あるときから繰り返されるようになることも特徴的である。これは、そのことの重要性が意識に湧き上がってくる・経験の重みづけがなされたことによると考えられる。また、3学期末以降など「振り返って語る」ときに語り方・意味づけが大きく変容していた。「過去」の経験を語りなおすことを通して、経験を意味あるものとして位置付けていくことが、新任教師にとって重要な意味を持つと考えられた。